様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０３０５９

研究課題名（和文）適応上の問題を抱える生徒に対する援助的な視点に基づいた『教育臨床的進路指導』

研究課題名（英文）Supportive career guidance for the students who has adaptive problems

研究代表者
磯邉　聡（ISOBE, Satoshi）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０３０５１０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：内閣府の調査によると、不登校や中途退学者など適応上の問題を抱える生徒は将来ニート状態になる危険性が高いことが示されており、これらの生徒に対する適切な進路指導は喫緊の課題である。近年は進路に関して多様な選択肢が存在するものの、安易な決定によってミスマッチが生じ、再度不適応に陥る事例も生じている。
本研究は、適応上の問題を抱える生徒に対する援助的な視点に基づいた『教育臨床的進路指導（支援）』という概念を提案し、そのあり方について検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
進路指導やキャリア教育について論じられたものは多い。また、不登校生徒や進路変更を含む中途退学者への進路支援等について論じられたもの多い。しかし、「援助的な視点に基づいた進路指導（支援）」について論じられたものはほとんど見当たらない。
本研究では「進路指導」と「生徒指導・教育相談」そして「特別支援教育」を融合させた『教育臨床的進路指導（支援）」という包括的な概念を提示し、生徒の社会的自立や適応に寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：According to a survey by the Cabinet Office, students with adaptive problems such as not attending school and school dropouts are at high risk of becoming NEETs in the future. Therefore appropriate career guidance for these students is an urgent issue.In recent years, although there are various options for career paths, there are cases where careless decisions cause mismatches and fall into maladaptation again.
This study proposed the concept of "Clinical Educational Career Guidance (Support)", which is based on the perspective of assisting students with adaptive problems, and examined how it should be.

研究分野：臨床心理学

キーワード：進路指導　教育相談　特別支援教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

内閣府の調査によると、不登校や中途退学者など適応上の問題を抱える生徒は将来ニート状態になる危険性が高いことが示されており、これらの生徒に対する適切な進路指導は喫緊の課題である。近年は進路に関して多様な選択肢が存在するものの、安易な決定によってミスマッチが生じ、再度不適応に陥る事例も生じている。このことは適応上の問題を抱える生徒の進路選択に際して「支援」という視点に立脚した進路指導が求められることを意味しているが、このような援助的な視点に基づく進路指導に関するまとまった知見はない。

本研究は、適応上の問題を抱える生徒に対する援助的な視点に基づいた『教育臨床的進路指導（支援）』という概念を提案し、そのあり方について検討を行った。

２．研究の目的

本研究では適応上の問題を抱える生徒に対する援助的な視点に基づいた進路指導を『教育臨床的進路指導（支援）』と名付け、以下の点を明らかにすることを目指す。そして最終的には、教職員向けの『進路支援ガイドライン』を作成し、広く知見の周知と活用を図る。

①『教育臨床的進路指導（支援）』の概念整理

不登校や進路変更を含む中途退学といった適応上の問題を抱える生徒に対する、援助的な視点に基づいた『教育臨床的進路指導（支援）』の定義づけを試み、これまでの生徒指導・教育相談、進路指導、特別支援といった諸概念との関係性を整理する。

②適応上の問題を抱える生徒に対する進路指導上の特徴や困難さの明確化

生徒、保護者、担任や学校にそれぞれ焦点を当て、進路や進路指導という点において、どのような特徴や困難さ、そして予後や転帰が存在するかを明らかにする。

③『教育臨床的進路指導（支援）』の構築とガイドラインの作成

①②を踏まえ、『教育臨床的進路指導（支援）』の概念体系を構築し、指導上の視点、姿勢、方法やヒント等を明示したガイドラインを提示する。

３．研究の方法

本研究では上記の目的を達成するため、事例研究や半構造化インタビューを主たる手法として用い、さまざまな事例を収集し質的な分析を行った。

具体的な調査対象機関は、適応上の問題を抱える生徒を積極的に受け入れている公立の全寮制および宿泊型フリースクール（２箇所）、適応上の課題を抱える若者に対する支援活動を行っている機関、不登校児童生徒を大幅に減少させることに成功した教育委員会、適応上の課題を抱えた思春期・青年期の生徒を受け入れている精神科デイケア、等である。

４．研究成果

本研究の主たるプロダクトを「手引き（ガイドライン）」として以下に示す。今後も『教育臨床的進路指導』についてさらなる概念整理と多角的な支援方法についての検討が求められる。

適応上の問題を抱える生徒に対する援助的な視点に基づいた『教育臨床的進路指導』の手引き（ガイドライン）

○基本的な姿勢

１：支援者に対して

①『「進路指導（ガイダンス）」から「進路支援（サポート）」へ』という姿勢の転換、②「進路」を幅広く柔軟に捉え、大人になったときの適応から逆算した重層的な支援の継続、③支援者が社会参加のさまざまな選択肢や可能性について幅広く知ること、④校内組織だけでなく、「教育」＋「福祉」＋「医療」＋「地域リソース」といった他職種の外部機関と有機的な連携をはかること、⑤連携は在学中だけでなく、卒業後をも視野に入れて丁寧に行うこと、⑥適切な機関につないだり協働できたりする「ネットワーク構築スキル」を磨くこと、が求められる。

②生徒に対して

①適切な人や機関に上手に頼れるような「援助希求行動スキル」を獲得・伸長させること、②自己理解および自己受容を深め、「身の丈に合った適応」を目指すこと、③継続してエンパワーメントがなされること、④社会参加というゴールを共有し、「同行二人」の姿勢で寄り添う伴走者が存在すること、⑤本人を支える資源としての保護者や家庭支援がなされること、が求められる。

○校種別の留意点

１：中学校の生徒に対して

適応上の課題を抱える中学生に対する進路指導は，通常の進路指導と共通する部分がある一方で，さらなる視点やスキルそして体制が求められる。ここでは次の４点についてその重要性を指摘する。

①共感し寄り添う姿勢
　適応上の課題を抱える中学生やその保護者，そして担任に生じやすい特徴や気持ちに共感を示すことが何よりも重要である。特に，自己肯定感の低下や傷つき，そして主体性の後退などは，自らの生き方を自己決定する進路指導場面では大きな障壁となりやすいので丁寧な対応が必要である。このほかにも，現実検討力の低下，葛藤，否認，回避などといったさまざまな特徴が現れやすいことも理解し，一緒に歩んでゆくといった寄り添う姿勢が求められる。
②中長期的な展望に基づいたより早期からの支援
　適応上の課題を抱える中学生に対する進路指導は，将来の社会参加までを視野に入れ，中長期的な観点から行われることが大切である。上述のような心理的な特徴に加え，経済的あるいは家庭的な問題を抱えているケースもあるので，それらに対する支援も同時並行的に行われる必要がある。これらのことから他の生徒に比してより早い段階から，常に進路選択や進路決定場面について意識し，関わりを展開することが求められる。
③多面的な理解と重層的な支援体制
　適応上の課題を抱える中学生に対する進路指導は，教育相談・特別支援教育・生徒指導・進路指導・ソーシャルワーク（社会福祉）といったさまざまな視点からの理解を統合した上で行われるものであり，多様な専門性をもったスタッフからなるチーム支援が基本となる。またこれらの支援は，生徒やその保護者だけでなく必要に応じて担任や学年そして関係機関なども対象とするものであり，重層的な支援とそれを可能とする支援体制が必要である。そして，本人－保護者－学校－関係機関との間で信頼関係を築き，しっかりと「つなぐ」技術が求められる。
④「進学して終わり」ではないという意識
　適応上の課題を抱える中学生は進学先や次の居場所などでも再び不適応に陥る可能性がある。進路指導にあたる際は，単に「進学して終わり」ではないということを常に念頭に置くことが求められる。在学中から卒業後の支援体制や役割分担などについても思いをめぐらせ，学校を離れた後も生徒や保護者が支援の輪の中に入っていられるような手はずを整えておくとともに，生徒や保護者に対してこれから起こる可能性のある事態やそのときに取りうる対応の選択肢などについてあらかじめ話し合っておくといった「心理教育」の実施が有効である。

　このように適応上の課題を抱える中学生に対する進路指導はきわめて多岐にわたるものであり，担任や進路指導担当者がひとりで担うといった性質のものではない。さまざまな専門性を持ったスタッフから構成される校内体制のもと，保護者や関係機関と密接な連携を図りながら地道ながらも着実に展開されることが求められる。このような適応上の課題を抱える中学生に対して行われる『教育臨床的進路指導』は，まさに学校という場の特性を最大限に生かした援助行為そのものにほかならない。

２：高等学校の生徒に対して
　適応上の課題を抱える高校生に対する進路指導は，上記の中学校教師に対する進路指導と共通する部分がある一方で，高校という特徴を踏まえた視点や工夫，そして体制が求められる。ここでは，次の５点についてその重要性を指摘する

①的確な見立てに基づいた重層的かつ組織的な関わり
　適応上の課題を抱える高校生に対する進路指導を行う際は，適切な見立てがまず求められる。それは，生徒個人の特性のみに留まるものではなく，家庭背景や地域的特性，そして学年団や担任の特性なども視野に入れた包括的な見立てが求められる。そして，これらの見立てに基づいて，教育相談，進路指導，生徒指導，特別支援教育，ケースワークなどの視点からそれぞれの専門性を活かした担当者によるチーム支援が必要である。そのためにも，校内体制の整備や研修の実施に加えて，関係機関との良質な連携が求められる。
②共感的に寄り添いつつ，主体性を引き出し問題に向き合えるような支援
　適応上の課題を抱える高校生には，傷付きや自尊感情の低下，自主性や主体性の後退といった特性が見られることが多く，これらの特性は自己決定を大きく妨げるものである。進路支援にあたるものは，これらの特性や背景を十分理解した上で，共感的に寄り添い，自分の現状や持ち味を受け止めながら現実的な進路選択や人生設計を行えるような支援が求められる。これらを可能にするためにも支援者には，進路指導に加えて，教育相談や特別支援教育といった領域に対する理解とスキルが不可欠である。
③「その後の漂流」を回避するための確実につなぐ手だて
　さまざまな事情で中途退学や進路変更を決断したものの，次の進路が決まらない，あるいは次の進路先でも不適応になり所属を失ってしまう，という可能性も否定できない。冒頭で述べたとおり高校中退はニートのハイリスク要因のひとつであり，そのようないわば「漂流状態」を回避するためにも，確実に次の進路を決定した上で進路変更を行う支援体制や，所属の有無にかかわらず継続的な支援を行う機関や制度へつなぐといった幾重ものセーフティーネットで生徒や家族を支えてゆくケースワーク的な対応も重要である。
④正確かつ最新の情報の提供
　さまざまな就学形態や制度が整えられている現在，適応上の課題を抱える高校生の進路支援

にあたるものには，常に正確で最新の情報を得ようとする姿勢が求められる。それぞれのメリットとデメリットを熟知し，生徒や保護者と丹念に検討することでミスマッチやさらなる不適応を減らすことが可能となる。また，欠課時数といった在籍にかかわる情報も早めに本人や保護者と共有し，できるだけ準備期間を長く取れるような工夫や手だてが求められる。

⑤義務教育段階における適切な進路支援

回答の中には「普通高校ではなく，生徒にとってより適切な支援や教育が提供される学校に進学していれば不適応は防げたのではないか」といった記述がいくつも認められた。これらは，高校側の課題というより，義務教育段階で適切な進路支援がなされてこなかったということを示唆している。そのためにも小中学校と高等学校との日頃の相互理解や連携を深めることはもとより，適応上の課題を抱える児童生徒に対する援助的な視点に基づいた『教育臨床的進路指導』の充実が求められるだろう。

中学校における調査と同様に，適応上の課題を抱える生徒に対する進路指導は，教育相談や特別支援教育，そしてケースワーク的な視点を統合し，重層的に行われる必要があることが明らかになった。特に，『欠課時数』の存在は高校特有の事情であり，生徒に寄り添う姿勢とともに，現実的なリミットや制約にも目を配らなくてはならないという難しさがある。さらに，適切な機関や制度に確実につなぐというスキルも求められる。

これらのことは進路指導担当者や担任のみでまかなえるものではなく，『教育臨床的進路指導』という視点に基づいたチーム支援が不可欠といえる。

いっぽうでこれらの重要性は十分に承知しつつも，人や時間そして教職員間の理解の不足等から必要な対応が取れないという現状も明らかになり，今後の課題としてあげられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 磯邉　聡	４．巻 25
２．論文標題 臨床場面において「聴く」ということ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 千葉大学教育実践研究	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺ルカ、磯邉　聡	４．巻 25
２．論文標題 高等学校における効果的なチーム支援体制について－養護教諭の立場から－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 千葉大学教育実践研究	６．最初と最後の頁 96-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 磯邉　聡	４．巻 69
２．論文標題 適応上の課題を抱える生徒に対する『教育臨床的進路指導』（２）－支援経験を持つ高等学校教員を対象とした調査から－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-69-P1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 磯邉　聡	４．巻 14(1)
２．論文標題 コロナ禍におけるこころのケア－スクールカウンセラーからの提言－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学校救急看護研究	６．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯邉　聡	4．巻 68
2．論文標題 適応上の課題を抱える生徒に対する『教育臨床的進路指導』（１）－支援経験を持つ中学校教員を対象とした調査から－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-68-P77	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 磯邉　聡	4．巻 67
2．論文標題 『適正支援』という視点に基づいたかかわり－子どもの「環境と折り合う力」を育む支援のあり方をめぐって－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-67-P33	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 磯邉　聡	4．巻 26
2．論文標題 援助者とこころの傷つき　－『治療的傷つきやすさ』をめぐって－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 千葉大学教育実践研究	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S27588025-26-P1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関